

ドイツ語における *werden*-Passiv の時間指示

— 手紙を資料として —

Temporal Reference in German Passiv Sentences

— In the Personal Letters —

板山 眞由美*

Mayumi Itayama

ドイツ語において、助動詞 *werden* と動詞の過去分詞からつくられる、いわゆる動作受動 *werden*-Passiv の時間関係は、時制はもとより、過去分詞として用いられる動詞の動作態と、主語の人称やその数、さらには他の文要素がつくりなす文内脈絡や、前後の脈絡との連関によってその都度解釈されると考える。本稿は新たに得た資料に関して、この文法形式の持つ時間的意味について調べ、そこにどのような傾向が見られるかを整理し、分析する。

キーワード：*werden*-Passiv の時間指示、動詞の動作態、完了動詞、非完了動詞、事柄の実現・非実現

I. はじめに

筆者は *werden* と動詞の不定形がつくる構文の意味用法を研究する過程で¹⁾、*werden* が同様に助動詞として用いられ、動詞の過去分詞と結びついてつくりなす受動文に注目するようになった。このいわゆる動作受動 *werden*-Passiv は、文法化された形式とはいえ、*werden* が持つ完了的・起動的意味が、他の文要素や文脈との関わりの中で、時には保持され、また場合によっては背景に押しやられるなど、そこにはさまざまな連関が認められる。文の時間指示という観点から特に重要なのは、過去分詞の形で用いられる動詞の動作態 *Aktionsart* である²⁾。また文の表す事柄が（発話時点で）実現しているかどうかについては、他の文要素、特に主語の数、時間や様態を表す副詞規定や前後の脈絡などがその解釈に総合的に関与していると考えられる。筆者は、種々の資料から得た文例にもとづいてこの主張を検証してきた。本稿の目的は、新たに得た資料に関して、この文法形式が持つ時間指示について調べ、そこにどのような傾向が見られるかを整理・分析し、その結果をもとに考察することである。同じ資料について筆者は、研究ノートとして(板山, 2010)主に動作態との関わりから整理を試みた。本稿ではそこで除外した過去形、完了形、助動詞と共に起した場合、接続法の用例について整理をし、この形式の時間指示に有意にはたらく要因の全体

*流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

像に迫りたい。

本稿で取り上げる資料は、第二次世界大戦中、出征した息子へ書き送った一人の母親の手紙を集めた *Kriegsbriefe aus Duisburg* (Werner Greve 編. Zeitgut Verlag Berlin, 2005) から得た³⁾。筆者が在外研修で 1997 年 9 月から半年間滞在して以来、しばしば訪れている町 Duisburg の書店で偶然見つけた 175 ページのこの本に収められた手紙には、息子の健康や食糧事情を心配し、次の休暇がいつ許可されるか、いつ息子に会えるかと再会を待ちわびる母親の気持ちや、毎日のように繰り返される空襲への不安、限られた物資で何とかやりくりしている生活の様子が綴られている。文体は基本的に書きことばではあるが、息子に語りかけるような手紙文には、話しことばに通じる点も多い。受動文の用例は 171 例認められた。ちなみに本動詞 *werden* と *werden*+不定詞構文を含む文は合わせて 136 例であった⁴⁾。

II. *werden* が単独で用いられた場合

1. 直説法現在形 (93 例)

a. 完了動詞の場合

過去分詞として現れる動詞の動作態 Aktionsart が完了的 perfektiv である時、事柄は当該の文が書かれている時点で、まだ実現していない。即ち後時的に解釈される。(用例に続くカッコ内の数字はページ数を示す。斜体は筆者による。编者自身による短い説明はカギカッコ [] でくくられている。) 文中に *wahrscheinlich*, *sicher*, *wohl* など話法的副詞が合わせて用いられている場合 (以下の文例 3、5 など計 6 例) や、5) に見られるように *es ist möglich* という主文に導かれた副文中で用いられた場合は、当該の文は、その事柄の実現する可能性についての書き手による「きっと、多分、恐らく、もしかしたら～かもしれない」などの判断、即ち推量を表している。

- 1) Eben *wird* Herr Mantell *zurückgerufen*.: „Urlaub abbrechen, sofort zurück.“ (68)
- 2) Dem Schüler *wird* auf Grund der nachgewiesenen Einberufung (...) die Reife *zuerkannt*. (75)
- 3) Wahrscheinlich *wird* der große Keller nach vorne *zugemauert*. (78)
- 4) Die Abteilung von Vati *wird* sehr *zusammengelegt*, da keine Verwendung für sie besteht vorläufig. (87)
- 5) Es ist ja nun möglich, daß Ursel und ich für längere Zeit von Euch *abgeschnitten werden*. (171)

b. 非完了動詞の場合

過去分詞として現れる動詞の動作態が非完了・継続的 nicht perfektiv であり、さらに他の文要素や様態を表わす副詞・副詞規定、前後の脈絡などが示す状況から、以下では発話時点で事柄は既に起こっている、起こりつつある、即ち同時的に解釈される場合が多かった。

- 6) Wie schön, daß Ihr so gut *verpflegt werdet* und in der Kantine solche Herrlichkeiten dazukaufen könnt. (12)

- 7) Es *wird* fieberhaft *gearbeitet*. (43)
 8) Herr Volkmann [Dirigent] gibt seine Konzerte im Theater, das notdürftig *repariert wird*. (45)
 9) Dafür *wird* der Mann eben *bezahlt*. (121)

一方、以下に示す 10) で動作態は非完了的ではあるが、前後の脈絡から当該の文が書かれた時点で既に実現している状態ではなく、「(以降は)～される」という予定を表していると解釈され、後時的に用いられている。

- 10) Hier *werden* die Jungens mit den Luftwaffenhelfern oder mit anderen Schulen gemeinsam *unterrichtet*. (94)

c. 反復的な解釈の場合

この場合、過去分詞として現れる動詞の動作態は完了的、非完了的、両方の場合があるが、他の文要素や文脈が与える状況から、事柄が反復的に起こっているとして同時的に解釈される。反復的 *iterativ* という読みを導く条件としては、たとえば主語が複数である、不特定のものである、文中に継続的な様態を表す副詞や副詞規定が用いられている、文脈によって一定の事柄が繰り返し起こることが示されているなどが挙げられる。

- 11) Der ganze Schutt *wird* in der Lerchenstraße *aufgestapelt*. (43)
 12) In allen Häusern und Etagen *werden* Zimmer *beschlagnahmt*. (60)
 13) Unser Abendessen haben wir auf halb sieben vorverlegt, da wir sonst jeden Abend dabei *gestört werden* und erst gegen neun vollenden können (durch Alarm) (60)
 14) In den Keller gehen wir, sobald *geschossen wird*. (66)

2. 直説法過去形 (37 例)

直説法過去形の用例は 37 例見られた。過去時制の場合には、動詞の動作態に関わりなく、基本的に事柄は実現している。従って時間指示は前時的である。

- 14) Vorhin *wurde* wild hier oben *geschossen*. (21)
 15) Frl. Nebe [Blitzmädchen] kam sehr enttäuscht von ihrer Weihnachtsfeier, wo zu aller Enttäuschung kein einziges Weihnachtslied *gesungen wurde*. (55)

しかし一方で、間接話法の用例として解釈できるものが 4 例あった。例えば以下の 16) では名詞 Durchschlag (複写) が後に続く関係文を導入する役割を果たしている。夫に宛てられた書状に同封されていた手紙のコピーが指示した内容は、その動作態が完了的であることから (*genommen werden* 奪われる)、その手紙が書かれた時点でまだ実現してはいない。即ち、過去から見た未来に実現されるものとして後時的に解釈される。本来は接続法で表示されるべきであるが、一貫して過去形で語られる脈絡に支えられ、後事的な解釈を導いている。その他の 3 例においては、事

柄は書かれた時点で既に実現したものとして前時的に解釈された。

- 16) Gestern kam vom Gau in Essen ein Schreiben an Vati, dem der Durchschlag eines Briefes an E. beilag, wonach diesem ab sofort jegliche Rechte technischer, kaufmännischer und personeller Art für alle Abteilungen hier *genommen wurden*. (56)

3. 現在完了形、過去完了形 (7例)

過去形に比べると5分の1以下の数ではあるが、現在完了形5例、過去完了形2例が見られた。過去時制の場合と同様、事柄は既に実現していると解釈される。現在完了形の場合には17)が示すように、前後の脈絡に現在時制が認められ、過去完了形の場合には、過去に起こった一定の出来事のさらに以前に起こった事柄が述べられているという時間関係が指摘できる。しかしながら文例が少なく、同様の条件であっても、過去形が用いられた場合も多く見られた。従って、現在完了形と過去形との間の用法上の異なりや、文体的な異なりについてはここでは触れない。

- 17) Im Hause gibt es allerlei zu putzen, da ja acht Tage nur von der Omi *gepfuscht worden ist*. (17)
- 18) Er *ist eben übergangen worden*, als Vati den Batteriechef um Urlaub für Tia bat am ersten Sonntag. (121)
- 19) Lenzes [Freunde von Vater] riefen aus Köln an. (...) Frau Jakobi [Kriegskamerad von Vater] *war* extra unseretwegen von ihm und Holland aus Nantes *angerufen worden* usw. (28)

4. 接続法 (6例)

接続法I式の文例はなく、接続法II式の文例が6例見られた。非現実条件文に続く1例を除いた5例が間接話法の用例で、denken, bestellenなどの導入動詞、あるいは導入名詞によって導かれた副文中で用いられていた。時間指示は20)においては前時的、21), 22), 23)ではいずれも動作態が完了的であることなどから、後時的であると解釈される。即ち書き手が当該の文を書いた時点で、事柄はまだ実現されていない。導入動詞が過去形や、導入名詞が過去の文脈に現れる場合は、過去から見た未来の実現を表す、即ち予告を表していると解釈される。

- 20) Wir dachten, Duisburg *wäre* wieder *erwähnt worden* am Freitag. (30)
- 21) Man munkelt, der Reichstag *würde einberufen*. (67)
- 22) Dann kam heute morgen um 9 Uhr ein Telegramm von S., daß er im Februar zu einer zweiten Prüfung nach Stralsund *berufen würde*. (118)
- 23) Tia ließ bestellen, daß sie *verlegt würden*. (148)

Ⅲ. 助動詞との共起

1. 話法の助動詞と共起した場合 (21 例)

話法の助動詞 Modalverben と共起している用例は 21 例あった。多い方から *sollen* 8 例、*müssen* 6 例、*können* 4 例、*dürfen* 3 例で、そのうち *können* が接続法Ⅱ式で用いられた 1 例を除くと、他はすべて直説法であった。そのうち過去形 (*müssen*)、現在完了形 (*können*) がそれぞれ 1 例ずつ見られた。*werden*-Passiv が単独で用いられる場合は、上で整理したように、動詞の動作態と時間指示との間に一定の規則的な連関が見られた。しかし話法の助動詞が定形の形で用いられ *werden*-Passiv がその文の中に組み込まれている場合には、助動詞の時制と話法形式が文全体にかかり、時間指示に有意に影響を持つ。さらに話法助動詞が持つ具体的意味 (公的な取り決め、要請、必然性、可能性、許可・禁止など) がそれぞれ付加されるため、当該の文が書かれた時点で事柄が既に実現しているかどうかについては、その文自体のみから判断することは難しい⁵⁾。但し *sollen* に関しては、公的な取り決めにもとづいて「～されることになっている」、あるいは主語以外の他者の意志で「～すべきだ (と言われている)」という要請が表されていて、要請されている行為や計画はまだ遂行されていないとして、いずれの文例も後時的に解釈された。

過去形の文例は *müssen* で 1 例のみ見られた。以下の 29) は過去形であるが、主文の Motto の内容を説明した副文の中で用いられていることから、間接話法に準じた用例であると考えられる。従って過去形ではあるが、事柄の実現に関しては *müssen* が現在形で用いられる場合と同様に解釈できる。ここでは Motto の内容として「～されなければならない」という強い要求を表していて、事柄はまだ実現されていない。従って後時的に解釈される。

現在完了形も少なく *können* で 1 例のみ見られた。*Werden* が単独で用いられた場合と同様に、事柄は既に起こったものとして前時的に解釈された。

いわゆる主観的用法は *können* で 1 例 (文例 27) 見られた。接続法Ⅱ式の形で用いられ、主観的な可能性にさらに非現実性が加わり、その可能性がごく小さいという判断が表されている。

24) Es *sollen* zwei bis drei Volksschulen *geöffnet werden*, aber in den Vororten. (108)

25) Schreibe bitte bloß Vati nichts. Er *soll* wirklich *überrascht werden*. (133)

26) Schloß Sanssouci *kann* von innen nicht mehr *besichtigt werden*. Man hat es wohl ganz ausgeräumt.
(12)

27) An mich *könnte* mal *zensiert werden*. (72)

28) Aber auch im Eßzimmer *müssen* erst Scheiben und Rollläden *gemacht werden*. (153)

29) Der Abend stand unter dem Motto, daß Tias Einjähriges *gefeiert werden mußte*. (99)

30) Frau Kampf sagte, daß Wohnungen von Soldatenfrauen nicht *beschlagnahmt werden dürfen*. (46)

2. *werden* と共起した場合 (3 例)

話法の助動詞との共起が 21 例認められたのに対して、助動詞 *werden* と共起した場合は 3 例にとどまった。(現在形 2 例、接続法 II 式 1 例) 現在形の 2 例は、文中に *sicher*、*wohl* という話法的副詞が合わせて用いられていることから、未来に起こる事柄についての書き手の判断・推量であると解釈され、時間指示は後時的である。接続法 II 式 *würde* の文例は 1 例のみであった。先行する副文がつくる脈絡から、*dann* によって導かれる帰結としての事柄が、現実には存在しない非現実なものであることを表している。受動文を構成する助動詞 *werden* 自身の接続法 II 式に代わる形、その代用形として *würde* が用いられている。

- 31) Die ganze Ecke von der Lerchenstraße bis Manteuffelstraße und sicher fünf Häuser der Lerchenstraße *werden ganz abgerissen werden*, auch das erste Haus Manteuffelstraße. (42)
- 32) Ja, nun *wird* Eure rüstige Mutter wohl auch *eingezogen werden*, (67)
- 33) Ich finde es unerhört, daß eine Stadt, die so gefährdet ist, nicht dauernd unter schwerer Bewachung steht, dann *würde* ihnen die Sache schwer *verleidet werden*. (43)

IV. 考察

上の結果をもとに、後時的、同時的、もしくは前時的な時間指示の解釈を導く条件を以下にまとめると、1) 動詞の動作態、文内の他の要素、文脈、2) 時制、3) 接続法、4) 話法の助動詞との共起、5) *werden* との共起、を挙げることができる。

1) 動詞の動作態と後時性、同時性

直説法現在形の *werden* が単独で用いられる場合は、過去分詞とし *werden* と結びつく動詞の動作態が、実現性の解釈に有意に影響する。完了的 *perfektiv* な動詞の場合には、通常事柄は実現していない(後時的)。非完了的・継続的な動詞の場合には、事柄が実現している場合(同時的)と、前後の脈絡から、まだ実現していない場合(後時的)とがあった。また主語が複数であったり、不特定なものを指していたり、継続や反復を示す時間副詞や様態を表す副詞規定によって、反復的 *iterativ* な動作態が認められる場合には、動詞そのものの動作態の如何に関わらず、事柄が繰り返し起こっている(同時的)と解釈された。

2) 過去時制、完了時制と前時性

直説法過去形の *werden* が単独で用いられる場合には、基本的には事柄は実現している、即ち前時的に解釈された。そこでは動作態の如何に関わらず、事柄は生起したのものとして表されていた。一方で、間接話法の用例で、未だ実現していない事柄を表す後時的な *würde* の用例が認められた。

現在完了形、過去完了形の用例は少数あったが、いずれも事柄は実現したのものとして前時的に

解釈された。

3) 接続法

Werden が単独で用いられた場合は、6例のうち5例が、間接話法の中で用いられていた。従って事柄の実現に関しては、現在形の場合に準じて解釈できるものとする。接続法Ⅱ式の代用形 *würde* が用いられたのは、非現実な条件に対応する帰結として述べられたもの1例のみで、事柄の実現は否定されている。接続法Ⅱ式の代用形としても、この例のみが認められた。同じ文中でこの形を *werden*-Passiv に重ねて用いることを回避する傾向があるのではないか。

4) 話法の助動詞と共起した場合

特に *sollen* と共起した文例に関しては、いずれも公の取り決めや他者の要請が示され、発話時点で事柄は実現していない、即ち後時的に解釈された。その他の話法の助動詞については、個々の助動詞に応じて一定の具体的な意味（可能性、必然性、許可・禁止など）が付加されるが、事柄の実現自体に関しては当該の文からだけでは判断が難しい。

過去形は、間接話法の中で用いられた *müssen* の用例が1例のみ見られた。従って、過去形ではあるが現在形の場合と同様に解釈すべきと考える。当該の文例は、強い要求を表すものとして後時的に解釈された。いわゆる主観的用法は *können* で1例見られた。書き手の推量を表し、事柄の実現は可能性があるとしてのみ表されている。

5) 助動詞 *werden* と共起した場合

動詞の不定形と共に助動詞 *werden* が用いられる構文中で *werden*-Passiv が用いられた文例は、2例のみであった。助動詞 *werden* を重ねて用いる、いわば二重用法が、話法の助動詞と共起する文例に比べて格段に少ない理由は、*werden* が助動詞でありながら、本動詞として持つ意味「～となる」という変化や生成の意味と、起動的・完了的な動作態を保持しているために、特に動詞の動作態が完了的な場合、後時性を表すために敢えて用いる必要がない、剩余的であるとする語感によるものではないかと考える⁶⁾。また接続法Ⅱ式の代用形として *würde* が用いられた文例も1例のみで、この点からも *werden* を重ねて用いることを回避する傾向が指摘できよう。

VII. 結語と今後の課題

考察の結果をまとめると *werden*-Passiv の時間指示に関わる主たる要因として、1) 過去分詞の形で *werden* と結びつく動詞の動作態、文内の様態や時間関係を表す副詞や副詞規定などの他の文要素や文脈、2) 過去時制、完了時制などの時制、3) 間接話法、4) 助動詞との共起、が挙げられる。

次に後時的な用法に関しては、werden+不定詞構文が用いられない場合が多いという傾向が指摘できた。これは本動詞として werden が持つ起動的・完了的性質が werden-Passiv においても保持されるためであると考えられる。本稿での調査と考察の結果から、少なくとも動作受動においては剩余的であることが、限られた資料についてはあるが確認できたと思う。未来に起こる事柄についての推量を表す場合にも、動作受動においては werden+不定詞構文を用いずに、様態の副詞 wahrscheinlich、wohl、sicher、vielleicht などを用いることによって主観的判断であることが表されていた。また過去の脈絡の中において間接話法で述べられた場合に、過去形 wurde の形で、もしくは接続法Ⅱ式 würde の形で、過去から見た未来を表す後時的な用例が認められた。

話法の助動詞と共に用いられた場合には、それぞれの助動詞が表す意味が文全体にかかるため、事柄の実現に関して文脈をぬきにして判断することは難しいが、六つの話法の助動詞の中で最も多く認められた sollen は、いずれも後時的に用いられていた。後時的な時間指示を表現する形式として sollen は重要であると思われる⁷⁾。

上で述べた werden を重ねて用いる、いわば二重用法を回避する理由としては、文体的な配慮も挙げることができるが、さらに踏み込んで調査すべき問題である。一方で、話法の助動詞との共起が多く認められたことから、werden を重ねて用いることを回避する理由が、枠構造を既に形成しているためであるとする考え方は、その点で説得力に欠ける。

今後の課題としては第一に、これまでに集めた小説、報道記事、手紙文などから得た 1000 例を超える資料を、テキストの種類や書き手の発話意図、書き手と受け手との間の関係などの諸条件から比較し、分析する必要がある。その結果を踏まえて werden をめぐる種々の問題、特に時間的意味、話法的意味について調べ、本動詞であると同時に、助動詞でもある werden が持つ多義の様相と、その意味用法上の共通点について分析と考察を行う。新たな資料としては、例えば学校での授業場面、テレビのトークショーや討論番組など、話し言葉にも焦点を当てたいと思う。また親しい友人同士で囲む食卓やコーヒープレイクなど、くつろいだ場面で交わされる日常的な会話を集めることができないかと考えている。

注

- 1) この構文をいわゆる未来形 Futur として、時制体系の中に含めて捉える文法記述が多い一方で、この構文が持つ話法的な意味を根拠に、話法の助動詞として、もしくはそれと同列に記述する立場がある。筆者は後者の立場をとる。板山 (1997)、板山 (2008)、Itayama (2008) を参照されたい。Vater, H. が *Werden als Modalverb* (1975) でこの主張を提起して以来、論争が続いている。
- 2) Engel (1988, 455) は、過去分詞の「完結した」という意味は中和され、動詞の語彙的意味だけが残ると

述べている。過去分詞の時間的特徴については Leiss (1992, 183f.) の言及がある。

- 3) 編者 Werner Greve はこの手紙を書いた Else Greve(1900 年生まれ)の次男である。この母親が長男 Clemens Greve に宛てた手紙を、本人の死後、義理の姉より譲り受けてまとめた。父親 Werner は Duisburg に本社のある造船所の営業部長であったが、第二次世界大戦が始まると志願して海軍将校となった。長男 Clemens は 1924 年生まれで、愛称は Bubu、1942 年に召集され海軍士官候補生となる。末娘の妹 Ursula は 1935 年生まれである。編者である Werner は 1928 年生まれ、愛称は Tia、空軍武器補助要員として 1944 年に召集される。
- 4) 本稿では zu と共に不定詞として用いられた用例、4 例は対象から除外した。例: Die Sache scheint ja etwas aufgefangen zu werden. (162)
- 5) 例えば Ich will/möchte/soll/muss/kann/darf Zeitung lesen. では、助動詞が用いられることにより、主語が表す主体が Zeitung lesen という行為の遂行に向けて「強い意志」、「願望」、「義務」、「可能性」などを持つことを表わしている。しかし主語 ich が発話時にその行為を行っているかどうか、即ち「新聞を読んでいる」かどうかについて、この文自体は何も述べていない。
- 6) 1995 年夏、京都で開催された独文学会主催の言語学ゼミナールにおいて、筆者は Joachim Ballweg 教授より「動作受動では、Futur としての werden は redundant (剰余的) である」との指摘を受けた。Helbig/Buscha (1986, 162) は「受動文の未来単純時制が用いられるのは比較的まれである」と記述しているが、その理由への言及は特でない。Welke (2009, 215f.) は枠構造が既にあることが、繰り返しを回避する主たる根拠であるとしているが、同様に枠構造をつくる話法の助動詞との共起が多数であったことから、この根拠だけでは不十分であると考える。上に挙げた論文で Welke はこの構文を Futur として時制体系の中に位置づけてはいるが、実際に用いられるのは主に標準語と文章語に限られるとしている。
- 7) 外国語としてのドイツ語 Deutsch als Fremdsprache をいかに教えるか、何を教えるべきという観点からは、初級後半から中級段階にある学習者は、未来に起こると予測や予定される事柄や行為を表す表現手段として、現在形の未来用法や werden+Infinitiv 構文だけでなく、sollen, wollen,そして möchte も含めた一連の話法の助動詞を合わせて学ぶ必要があると考える。

参考文献

- Duden (1995): Die Grammatik. 5. Aufl. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich.
- Engel, U. (1988): Deutsche Grammatik. Heidelberg.
- Helbig, G/Buscha, J. (1986): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. 9. Aufl. Leipzig.
- Helbig, G./Kempter, F (1997): Das Passiv. Zur Theorie und Praxis des Deutschunterrichts für Ausländer. Leipzig/Berlin/München/Wien/Zürich/New York.
- Itayama, M. (1993): *Werden* – modaler als die Modalverben! In: Deutsch als Fremdsprache, 4/1993, S.233-237.
- 板山眞由美 (1997): 現代ドイツ語における *werden*+不定詞について [日本独文学会編『ドイツ文学』 第99号、48-59 頁]
- 板山眞由美 (2000): *werden* 構文とアスペクト [流通科学大学学術出版会『流通科学大学論集 一人文・自然編一』第9巻/第1号、1-10 頁]
- 板山眞由美 (2008): *werden*+Infinitiv 構文の意味と用法 —その多義性の構造— [三瓶裕文・成田節編『ドイツ語を考える』149-158 頁、三修社]

- Itayama, M. /Shimokawa, Y. (2008) : Zur *werden*+Infinitiv-Konstruktion – Bedeutung und pragmatische Interpretationen – [獨協大学外国語学部ドイツ語学科『ドイツ学研究』第59号、79-91頁]
- 板山眞由美 (2008) : *werden*-Passiv と時間指示 —新聞記事を資料として— [阪神ドイツ語学研究会『会誌』20号、40-55頁]
- 板山眞由美 (2010) : ドイツ語における *werden*-Passiv の時間性 [流通科学大学学術出版会『流通科学大学論集—人文・自然編—』第22巻/第2号、133-135頁]
- Leiss, E. (1992) : Die Verbalkategorien des Deutschen. Berlin/New York.
- Vater, H. (1975) : *Werden* als Modalverb. In: J.P. Calbert-H. Vater (Hg), Aspekte der Modalität. Tübingen, S.71-148.
- Welke, K. (2009) : Contra Invarianz – Tempus im DaF (I) : Präsens und Futur. In: Deutsch als Fremdsprache, 4/2009, S.210-217.
- Zifonun, G/Hoffmann, L/Strecker, B. et. al.(1997) : Grammatik der deutschen Sprache. 3 Bände. (Schriften des Instituts für Deutsche Sprache 7, 1-3). Berlin/New York.